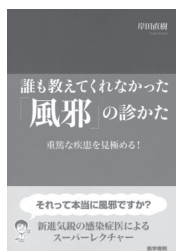


書評

[評者]

大曲貴夫

国立国際医療研究センター・
国際感染症センター



誰も教えてくれなかった 「風邪」の診かた

重篤な疾患を見極める！

岸田直樹 著

●A5 頁192 2012年
定価 3,360 円(本体 3,200 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01717-6]医学書院刊

研修医たちと接していると感じるのは、彼らが急性上気道炎(以下、本書に倣い「風邪」と表記する)の診かたを知らないということである。市中肺炎や腎盂腎炎、髄膜炎の診療は知っているのに、である。何とも不思議な状況であるが、無理もない。かわいそうなことに、医学教育の流れのなかで、風邪を系統的に教えることはまずないのだ。こんなにありふれた疾患であるにもかかわらず、だ。

恐らく多くの医師は、風邪自体を「そんなことは当たり前」として、そもそも医療上の問題として捉えていないと思われる。いわば医療化されることのない、体調不良の一種として捉えていることがほとんどである。しかし当事者である患者が風邪による症状に対して、民間療法では対処不能として医療を求めはじめたとき、結果として施される診療の中身は、顔をしかめてしまうものが多い。

問題の中身を挙げておこう。第1には、患者の問題は本来抗菌薬の必要のない風邪であるのに、別の診断を付けてしまうことである。発熱・咽頭痛・鼻汁で来院した患者に「A群β溶連菌咽頭炎の可能性あり」として抗菌薬を処方する、などがその例である。患者が抗菌薬アレルギーによる全身発疹を発症したらどうするのだろうか。第2の問題は、患者が発熱を訴えて来院した場合に、本来は重篤なほかの疾患によるものであるのに、「風邪」と診断してしまっ

た疾患を見落とし、後手に回ってしまうということである。当初「風邪」と診断され、結果的に深頸部感染症から縦隔炎・肺膿瘍となり亡くなった若者の事例などが報告されている。

本書は、これらの問題に切り込むため、風邪様症状へのアプローチとして「風邪を風邪と診断する」「風邪に紛れた風邪以外を診断する」ことの重要性を指摘し、その実際を説いている。「風邪を風邪と診断する」には、さまざまな臨床像を取り得る「風邪」を豊かなイメージとともに知っておく必要がある。それは疾患の発症から完成、そして改善までの一連の流れを、みずみずしい像として知っておくことにほかならない。本書はこの点を豊かに描いている。そして「風邪」のイメージを自分のなかで作り上げることができれば、そこに当てはまらない臨床像の患者に遭遇した場合に、何やらおかしいと感じとることができる、と指摘する。そうすれば後は「風邪に紛れた風邪以外を診断する」ために、風邪以外の疾患の臨床像を、やはりみずみずしいイメージとしてたたき込んでいけばよい。

本書は、その過程を導いてくれる良書である。この本を読んだら、まずは自分自身が風邪をひいたときや、家族や同僚が風邪をひいたときに、ぜひ本書の内容を適用していただきたい。そうやって繰り返し症例に当たり、検証することで風邪診療は身についていく。